

影が薄いことが、僕の
存在意義なのかも知れ
ないね……。

ゴズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何でもない日常を送っていた影井薄斗（かげいはくと）は、修学旅行に向かった先で幼馴染である創也一輝（そうやかずき）、天野小路友輝（あまのこうじゆき）の2人と共に廃れきった社を見つけた。そこに安置されていた一つの鏡。一輝と友輝が鏡に触れた瞬間眩い光が3人を包み、少年達の日常は変わることとなった。

目次

第一影	1
第二影	8

第一影

世の中に色々な人がいるのは、誰でも知っていると思う。

本当にそうなんだ。

例えば……朝はこの時間に起きないと気が済まない人とか、この時間まで寝ないと寝足りない人とか、この場所じやないと眠れないとか、あの場所では眠れないとか……一つの寝るって言う行動でも、パツと思いつくだけでこれ位は出て来るんだから、よく考えればもつとあると思う。

分かり易い例で言うならアレだ。

他人にどうでも良いと思われることが、自分にとって何よりも大切とか、そう言ったやつだ。

心当たりのある人は、軽く億を超えていると思う。

まあ、こんな周知の事を話していても何にもならないから、話を進めることにしよう。

存在感のある人っているよね？ 何もしてない、ただそこにいるだけで注目を浴びる様な人。心当たりが無い人は、登校、出勤した時、高い確率で視界に早く入る人を出してみれば良いかも知れない。多分その人が、あなたにとって存在感のある人だけ

ら。

存在感の無い人っているよね？ 何かをしても、いることをアピールしても気付かれない人。心当たりがある人は、きつとこっちは多いんじゃないかな？ 学校や職場でそういう話をするでしょ？ 影薄いよね、とか。

……ごめんね。これも周知の事だった。

うん。いい加減に話を進めよう。

僕の名前は影井薄斗。

名前の通り影が薄い唯の高校生で、今は楽しい楽しい修学旅行に來ている最中。行き先はありきたりな京都で、バスに揺られながら窓の外を眺めている所だ。

最後列左窓際に座っている僕の隣には、面白いことに学園NO. 1に輝く男女が並んで座っている。本当に面白いことに、この2人、創也一輝と天野小路友輝は、幼稚園の頃から僕の近くに居た。

理由は知らない。聞いて無いから。これからも、聞くつもりは無いから。

この2人は、さつき言った存在感のある人達。

この狭いバスの中で、今している様になんてことは無い話をしているだけで、生徒達の大半は2人を見る。いつもそうだ。2人の人気は衰える所を知らず、入学から1年が経った今でも上がっていく一方で、そんな2人は、同性からも慕われている。敵なんか

居ないんだ。本当に、誰一人として。憧れると同時に、諦めているから。

わざわざ自分から、楽しい筈の学園生活その3年間を手放しているから。

なんて、僕が言えたことじゃないけどね……僕を独白を聞いている人がいるとして、2人に対してどんな感情を抱いているのか。多分妬みとかそんな感じの感情を抱いているって思うかも知れない。

けど、それはどんなことが起こってもあり得ないことなんだ。

僕は、諦める以前に、憧れる以前に……2人に対して、何の感情も抱いていないから。それは2人も同じだから。

そんな始まる前に終わっている関係の2人に対して、どんな感情を抱けつて言うのさ。知っている人がいるなら——いいや、教えてくれなくて。どうでも良いから。

バスは無事宿泊予定のホテルに到着した。

夕食の時間まで、各自2時間ばかりの自由時間を与えられる。

そしてバスを降りた途端に待っているのは、2人と共に時間を過ごそうと待ち構える生徒の群れだ。

影の薄い僕はスルスルとその群れを抜け、部屋で時間を浪費する。つもりだったのに、いつもそうなんだ。この2人は、いつもこんな風に、

「悪いな。俺は薄斗といえんだ」

「ごめんね。あたしははくくんといたいの」

悉く僕を捕まえる。

2人に照らされたことで、漸く僕に気付いた生徒達は、一様に僕を睨み付ける。それはそうだろう。僕自身、なんで2人がこんなに僕といようとするのか分からないんだから、当事者じゃない生徒達からしたら、お前何様だ状態に見られるのは当たり前だ。

そしてこの後に起こることも、最早当たり前なんだ。

「——おい」

「——ねえ」

一転。2人の声が声帯を弄ったのかと思わせる程に低く、冷たく響く。そして生徒達はおろか、教師達ですら何も言えなくなる。

「今薄斗に死ねって言ったそのお前。今すぐ出て来い。俺がお前を殺してやる」

「はくくんのことウザイとか言ったそのアンタ。出てこないならあたしから殺しに行
くわ」

僕に聞こえない悪口、陰口を、2人の聴覚は敏感に捉える。その度に肩を震わせる生徒がいるんだから、正確さには毎回感心させられる。けど、なにはともあれ、美男美女の2人には普段こそ柔和な笑みを浮かべることが多い反面、こういう時に見せる怒りの籠った目は見る者全てに恐怖を与える訳なんだ。だって、普段のギャップに耐え切れな

くて腰を抜かす人なんて、今まで幾らでも見てきたから。

「聞こえなかったのか？ 出て来い。俺が殺してやるから。お前だよ、お前。金髪のチャラチャラしたギャル」

肩を跳ね上げらせて震える関口洋子さん。

「動くんじやないわよ？ その紫髪」

同上。三ツ屋健二くん。

このままでと関口さんは、やっぱりこれまでと同じ流れで出てこようとして、三ツ屋くんもこれまでと同じ流れで殺されそうになるんだろう。修学旅行で流血沙汰を起こすのは感心しない。旅館の前に血痕なんてあったら、一般客は引くのが当たり前だし。僕だったら間違いなく引くし。

そんなことはどうでも良いか。2人を止めよう。

「二輝、友輝。散歩でもしよう」

「お、良いな！ 3人だけの場所とか探そうぜ！」

「二輝にしては良い案ね。あたしもさんせうい！」

これまた一転。

スイッチを押した様に、2人は通常運転に戻る。いや、2人にとって、今日の中で自分達が異常だったことは一度もないんだろうけど。だって、今の今までの2人だって、

2人にとっては通常でしかないから。

子供みたいに両手を2人から繋がれ、群れを離れる僕達は、何も知らない人から見れば、兄弟にでも見えるかも知れない。

そんなことを考えながら、一輝の言う3人だけの場所を探す散歩が始まった。

それから1時間程歩いた所で、恐らく余り知られていないと思われる様な場所を、僕達は見つけた。

立て札や分かれ道なんか造られていない、自然に隠されたある通路。そこを通って辿り着いたのは、廃れきつた社で、狛犬の像は首から上が無くなっていた。長い間放置されて、風化したんだろう。心の中で、役目を全うし切ったことを願い、祈りを捧げる。こういう時、僕達は繋がるんだ。関節と関節を見えない何かで繋がれている様に、3人で同じことをしていることが分かるんだ。合図なんてしてないのに、一泊足りとも遅れることが無いんだ。始まりから終わりまで。

祈りを捧げて奥へ進むと、一步踏み出せば抜けそうな床ばかりの殿があり、一つの鏡が安置されていた。

好奇心と言う魔物を、誰しも抱えている。

その魔物は、時として到底抗うことの出来ない力を発揮し、宿主を思うがままに操るんだ。

一輝と友輝は、ふらふらと吸い込まれる様に鏡へ近付いた。

2人の手が鏡に触れると、途端眩い光が溢れ——視界を白一色に塗り潰した。

そして僕は、黒く鋭い何かに胸を貫かれて、死んだんだ——。

—
—
!!
!!

第二影

どうして僕は、今天井を見上げているんだろう？ 死んだなら、そこで終わって終わりなのに。確かに心臓が貫かれたのに。どうして世界に色があるんだろう？ 何を見ることも出来ない筈なのに。もしかして、僕は死んでいないのかな？ それだけはある得ないけど……：：：それでも無いと、こうして天井を見ていることの説明がつかない。意識もハッキリしてるし、自分が影井薄斗だって言う自覚もある。

疑問はまだ残ってる。まず、こんな豪華な天井を僕は知らない。真っ白で、細部まで裝飾が施されていて、シャンデリアが提がっている天井に覆われた部屋なんて知らない。首を動かせば、何処を見ても白しか無くて、眩しい位だ。

そこで思い出す。

廃れた社で見つけた鏡から、強烈な光が放たれたことを。

その直後にほんの一瞬だけ見た、どこまでも続く平原を。

2人はどうしたんだろう？ まあ、良いか。今はまだ横になっておこう。

遅まきながら気付く。全身白い服に包まれていて、髪が白くなっていることに。理由は考えても分からないから、早々に止めた。

そうして暫く天井を眺めていると、慌しい足音が聞こえた。勢い良く近付いてくるソレは止まることなく近付いて来て、扉を壊しながら2人が入ってきた。そのまま寝ている僕に駆け寄ってくる。それはそうと、扉が壊れた時の音は何だったんだろう？ キンツッて音がしたけど……。

「薄斗ー」

「は〜くんー」

鎧に身を包み、背中に大きな剣を背負っている一輝と、腰に2本の刀を差している友輝は、涙を流しながら、それでいて笑いながら僕を呼んだ。

1時間経って、その間にあれからのことを聞いたけど、どうにもここは地球ではない別の世界で、僕は10年間眠っていたらしい。ギルガイアと言う名のこの世界は、魔王とやらに支配されそうになっていて、救世主とやらを異世界から呼び出す為にあの鏡を3人で見つけた場所になんかこうにか転送したんだそうだ。それによってこの世界に連れて来られた僕達。正確に言えば一輝と友輝の2人は、こっちに来て早々存在を嗅ぎ付けた魔王の配下によつて殺されそうになったけど、そこで死んだのは僕だけ。で、大量に血を流して完全に死んでしまった僕を見て、2人は魔力とやらが目覚めたそう。配下を殴り殺した2人は、その後遅れて駆けつけたこのジルドイ王国が誇る騎士団に手厚く迎えられた。本来呼ばれる筈の無かった僕は連れて行けないと団長が言った

らしいけど、殺すぞと一言言っただけで了承したんだとか。王国の城に着いた2人は、城にいる王と王女の所へ殴りこみよろしく突っ込み、最高の医者を用意しろと命令したらしい。誰が見ても一目で死んでいると分かる状態だった僕なのに、2人は死んでいないと確信できたんだとか。それから医者が集まったけど、死んでいる人間を生き返らせることなんて出来る筈も無く、何もしない内から諦めたみたいで、2人が治療と呼ばれる物の扱い方を聞き出し、曰く洒落にならない魔力でソレを行使した結果——僕は生き返ったそうだ。

でも目を覚ますことは無く、王が言うには魔王の呪いとか言うヤツにやられた所為だと聞いた2人は、居所を聞きだした後城から装備なんかを奪って出て行き、5年の歳月を経て魔王を打ち負かしたらしい。そして呪いを解かせ、更に5年が経った昨日、僕の胸に刺さっていた黒く鋭い何かは完全に消滅し、今日こうして僕は目を覚ました。

「10年経った割りに、成長してないのは？」

「あ、それはね。あたし達3人共、不老不死になったからなの」

随分さらつと言う。

説明してもらうと、こつちに来た時点で2人はそうだったらしい。そして僕は、そんな2人の魔力を籠められた治療術で生き返ったからそうだったんだとか。あり得ないことだけど、2人が死なない限り僕も死なないそうだ。

「……はくくん、不老不死になるの、いやだった？」

「泣かなくて良いよ。何とも思つて無いから」

「そつかあ……よかつたあ」

「友輝。薄斗がそんなこと気にしないのは——」

賑わう2人から窓の外に目を遣ると、そこには中世ヨーロッパと言うか、そんな感じの景色が見えた。と言つても少しだけ。また2人を見ると、楽しそうに話していた。僕のことみたいだけど、どうしてそんなに話すことがあるのか本当に不思議だ。僕は2人のことを話しても、小さい頃からいることと名前を言えば終わりなのに。

と、また足音が聞こえてきた。近付いて来たソレは、扉が壊れていることに多少驚きながらも中に入ってくる。

入ってきたのは、蒼髪ツテールの小さな女の子と、逆立った金髪の男性。女の子は一輝に、男性は友輝の横に立ち、2、3言葉を交わすと僕を見た。

「コイツがハクト？ 大したことないじゃない」

「なんか……貧弱そうだな」

言つた瞬間、2人は何かを感じ取つたのか肩を震わせ硬直した。殺氣つて言うのは、こういう物を言うんだらうね。感情の籠っていない目で女の子と男性を見る2人。そこから中から軋む音が聞こえるけど、このままだこの城、壊れるんじゃないかな？ そ

んな状況でも、女の子と男性は一步足りとも動かない、と言うか動けない。冷や汗を大量に流しながら、短い間隔で息を吐いている。

「……………おなか空いたな……………」

「あ！ それなら、あたしがご飯作るよ！ こっちに来て野宿ばかりだったから、料理の腕上達したの！」

「俺だって、最高の飯を作るぜ！ 行くぞ、薄斗！ 友輝！」

「僕そんなに大食いじゃないんだけど……………」

僕を背負い、隣に並ぶ友輝共々異常な速度で城内を走る一輝。

辿り着いた食堂で食べた2人の合作料理は美味しくて、本当に気絶した。

翌日目を覚ましてそのことをお礼と共に言ったら、大号泣しながら抱きつかれた……………。

1週間色々あって、王と王女に謁見することになった。

あ、言葉が通じているのは、何かしらの力で勝手にこっちの言葉を話しているかららしい。怖いことこの上ない。

今居るのは謁見の間。左右には大量の騎士が居て、赤い絨毯の先には座っている男と女が居る。名前は長いから覚えられなかった。因みに、ここに来ているのは僕だけ。2人は近隣に発生した魔物とか言う生物を倒しに、5分前城の外へ出て行った。まあ、厄

介払いだろうけど。

「……………お前には2つの選択肢を与える」

立っている訳でも片膝を着いてる訳でも無い正座で、王の言葉を聞き流す。

間があつたのは目の前にいる僕を認識するまでに掛かった時間だよ。

どうせ緑な選択なんて無いし、どっちを選んでも結局この国の良い様に使われるだけ。魔王は既に打ち倒しているんだから、この国所かこの世界に居る必要もないんだけど……僕は元々来る筈じゃ無かつた訳だし。かと言って帰る方法は無ければ帰るつもりも無い。一輝も友輝も世界が滅ぶでもしない限り死なない。僕は2人と一緒に不老不死だから、1人でフラフラしていても問題ないだろうね。

王の話しが終わつたらしく、答えを聞いてきたきた所でまた城が軋み出した。帰つて来たらしい。そして消し飛ぶ謁見の間の巨大扉。

「お帰り」

「おお！ ちゃちゃつと終わらせて来たぜ！」

「ただいま、はくくん。お腹空いてない？」

空いてる、と答えれば、また片手ずつ手を繋がれる。僕は何とも無いけど、2人は恥かしくないのかな？ ……良いか。笑つてるし。

王の声を無視、と言うか耳に入つてない2人は僕を連れて歩き出し、謁見の間を出よ

うとした所で控えていた騎士達が武器を突きつけて来た。それでも歩みを止めない2人だけど、ちよつと待つて、と言えばピタリと止まる。

「二輝と友輝は、別にこの国の人間って訳じゃないんだよね？」

「ああ。どこの国にも属して無い」

「家は、ちゃんと森の中にあるけど」

「国以前に、この世界の住人でも無いからな……それがどうしたんだ？」

「いやね？ どうもここの人達は、2人のことを国民として捉えてる節があるでしょ？」

「……ああ、あるな。さつきもそうだったよ。な？ 友輝」

「ええ。魔物を倒したら、貴方は我が国の誇りです、とか言われちゃったし……あたし達は誰の物でもない、はくくんの物なのに」

僕にもそんなつもりは無いんだけど……どう思うかなんて個人の自由だから良いか。

「そういうことなんで王様、王女様。並びに騎士の皆さん。2人と、2人と共にいる僕が何をしようと、今の様に武力で制圧しようとするのは意味がありません。無駄な統率力を見せて戴き、誠にありがとうございました。それじゃ、行こう」

「おう」

「りようかい」

「……………ま、待つ——」

圧倒的な質量となった殺気に、謁見の間に居た全員が地に伏す音が聞こえた。